

大谷石

大谷石の外構は古くなっても何処となく風格さえ感じます。大谷石は栃木県宇都宮市大谷町から切り出される凝灰岩です。

古くは6～7世紀の切石積横穴室を持つ古墳に大谷石が使われた形跡があり、およそ1200～1300年前の寺院や歴史建造物の礎石や羽目石にも使用された歴史があります。

有名な所では1922年にフランク・ロイド・ライド設計の旧帝国ホテルに使用されました。この旧帝国ホテルは、後の関東大震災の被害を免れた為に、大谷石の耐久性が広く知られる事となり、その後高級住宅資材として全国に普及しました。

旧帝国ホテルの玄関部は、私たちが住む愛知県の有名博物館・明治村に現在も現況のまま保存されています。

約90年後の今でさえ外部に原型を残している訳ですから、今更ながらその耐久性と悠久の歴史には驚かされます。

柔らかく加工がしやすいことから関東を中心に東海や東北地方の住宅外構石材として、石塀・石垣・門柱に現在も用いられています。一般住宅の外壁や土蔵建設に普及したとはいえ、現代においても益々希少価値の高い、高級素材である事には変わりのないところです。同じように古くなった化粧ブロック等の、只々黒ずんで行く汚れの様とは、街中の外構を見比べて歩けば一目瞭然ですが、ほとんどのお宅が汚れつくそのままにしている事もあり、下地の素材がブロック製なのか天然大谷石なのか、区別がつかない方も多くおられるようです。

エクステリアを生業とする業者の方でさえ区別の知らない方もおられるようで無理からぬ所もあります。

昭和50年ころからでしたでしょうか。それまでセメント色ブロックしか無かった時代でしたが、そのセメントブロックに着色したカラーブロックが出始めました。まだエクステリアと言う業界呼称もなかった時代でフェンス・門扉も全てスチール(鉄)製だった頃です。最初は小型ブロックサイズを多少大きめにし、デコボコした石割風にしたスプリットブロックと呼ばれる製品で、大谷石を意識した(種石・ミソ)模様を入れ、カラーも、グリーン・イエロー・ホワイトの色付けをした、まさに大谷石の変色過程を意識するものでした。

その後に、全国の手ブロックメーカーのほとんどが、大谷石と同サイズのストーンと呼ぶ大型化粧ブロックを競い合うように製造する訳ですが、色分けも3種類が主で、大谷グリーン・大谷イエロー・大谷ミカゲ等の呼び名で90cmサイズの大谷ストーン(人造石ブロック)を続々と世に送り出したのです。

そういう経緯もあり、その大型ストーンブロックを大谷石と信じ込み施工をお願いしたユーザーも多くおられたようです。メーカー社名の後に大谷と名付けた商品が多かったものから、大谷石に馴染みのない地域の業者は、大谷とは人工の石製品と思い込んで業務していたのだとも聞きます。セメントに色を混ぜ合わせて作り出した商品ですから、最初

は綺麗に仕上がっても10年もすると色も抜け出し大気の汚れをそのまま吸い込み、更にはセメントから出る白華(セメントから出るアク)が黒染みに変わり、上部から徐々に黒ずんだ無惨な姿になってしまうのです。そのストーンも人件費や製造材料の高騰で、大谷石を凌ぐ価格になっていますから、**同じ様な金額を費やしたにしても 再生可能な天然大谷石を購入された方は、やはりお得だったと思います。**私達の仕事の呼称が、まだエクステリアと呼ばれていなかった頃からこの外構工事業に携わって来たわけですが、その当初から大谷石に惚れ込み、数多くの施工現場も作り上げてきました。

地域の普及総代理店として活動する時期もあった訳ですが、限りのある自然界に存在するものですから、採掘にも限度があり、普及しない時期もありました。無理のある地下露天掘りによる地盤陥没事故が採掘地の大谷町に災害をもたらした事は、いまだ記憶に新しいところです。

製品が不足してくる事も当然なのですが、確かな組積技術を持つ石職人も少なくなっている事も事実です。

「大谷石」と言う天然素材だからこそ、当社が取り組む再生システムで甦えさせる価値があるのです。

当時、大谷石と言う素晴らしい素材を選んで外構を作られたお客様の家なのだから。

